

ミュージアム通信

めくるめく、牛 — 牛が運ぶ願い事 —

[かわら版]

「寒中丑紅」新しい牛の置物が登場
新春限定ミニ展示
「吉祥〜めでたく愛でたい〜」

「十二支乃内 丑」三代豊国 画・
東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
重ねた座布団の上に撫で牛を置いている。



めくるめく、牛 — 牛が運ぶ願い事 —

動物第二弾！牛、ウシ

二〇一五年最初のミュージアム通信の特集は、江戸に生きた犬をめぐる話。今年の締めくくりとして、今回は牛に目を向けてみよう。

生物学的には偶蹄目ウシ科ウシ亜科に属する草食動物。野生種を家畜化したのが現在の「ウシ」だ。牛形埴輪、そして実際に遺体の出土例があることから、五世紀前半までには中国大陸から日本列島へ牛が渡来し、飼育が始まったようだ。^{※1}

緑の牧場、青い空の下、草を食む牛：そんな光景を想像すれば、自然と「のどか」という言葉が頭に浮かぶ。

「食べてすぐ寝ると牛になるよ！」食事の後にいふのなら、そう叱られた覚えのある人も多いだろう。実はこれは、江戸時代から子どものしつけに使われていた言い回し。



「駿牛図」(部分)一三世紀、東京国立博物館所蔵・画像提供

こうしたことが示すように、牛のイメージは「のんびり」であったり、ややネガティブに言えば「のろま」であったり、という色あいを帯びている。「鈍牛」という言葉が、時としてぐずでのろまな相手への揶揄になるのも、一例だろう。

都の名牛と荒ぶる牛

しかし、牛は異なるイメージも持っていた。「駿牛図巻」は古今の「名牛」を描いた図巻だ。現在は断簡が分蔵されている。都において、牛車を牽く牛は大切なもの。特に優れた牛は姿を描いて永く留め、鑑賞したいと思わ

せるに十分な存在だった。図版をご覧いただきたい。黒々とした体躯と、振り返りざまの表情は、落ち着きを備えていて思慮深げにさえ見える。ちゃんと各々の牛の個性を表現すべく、似絵の技法で描かれている。誰がどんな優れた牛を所有しているかに貴族たちは強い関心を持った。「駿牛図巻」自体は詞書がどの程度あったのか定かではないが、こうした作品はおそらく他にも制作されたと見られ、後白河院や後鳥羽院が所有した牛の産地が伝わる。

一方、牛車を従順に牽いでいるうちは良いけれど、ひとたび暴れだせば、牛は脅威になった。「年中行事絵巻」など都を描いた絵巻には、牛車に繋がれたまま大路を疾走する牛を制御できず、慌てふためく人々の描写が散見される。往來で暴れる牛の表現は、鑑賞者がそれに起因し



「年中行事絵巻」甲六巻(部分)一九世紀、東京国立博物館所蔵・画像提供
「年中行事絵巻」の模本。

た混乱の様を見て面白がるための、絵画的な誇張も含んでいるよう。しかし一方で実感を伴ったトラブルだった。実際に「迷い牛」が禁中や屋内に入り込んで、騒ぎになることは少なくなかったのである。

闘牛という文化が洋の東西どちらに存在するのを見て、牛の闘争心に火がつけば生半可なことでは敵わないことを、人々は重々承知していた。ちなみに、日本古来の「闘牛」は欧州のような牛と人(闘牛士)ではなく、牛同士の間

いである。小学校国語教科書掲載の『大造じいさんとガン』で知られる童話作家・椋鳩十による『やせ牛物語』は、宇和島の闘牛が題材だ。「やせの花」という名を与えられた一頭の人生ならぬ牛生を通し、四国の伝統的な闘牛の様子がかうかがい知れる^{※2}。

牛の力―神様を運ぶ、神様になる―

牛が持つ、大きな力を秘めた黒々とした体軀を人々は人力を超えたものとして、尊重してきた。

インドで牛が神の使いとして重んじられていることは良く知られているが、道教でも祖である老子は牛に乗って描かれることが多い。仏教で牛に乗っている明王様、と言えば大威徳明王である。この牛は実は閻魔天を表しており、閻魔天自身も曼荼羅では牛に乗った姿で描かれる(ここで言う牛は、どちらも厳密には

ヒンドゥー教で重んじられる水牛)。

さらに、天照大神の弟で八岐大蛇を退治した荒ぶる神、スサノヲ。牛頭・人身の牛頭天王はスサノヲの別姿とも言われている^{※3}。牛はわが国においても神の使い、神を運ぶ存在、さらに神そのものとして信仰を集めたのだ。

「牛に引かれて善光寺参り」という諺、これもその一端だろう。牛の角に引がかかった洗濯物を追いかけた老女が期せずして善光寺参りをした逸話から、思いがけず良い事をする、という意味を持つ。女性が日常行う仕事だった洗濯、さらに牛の存在をきっかけに、参詣する老女。この話が、善光寺に結びついたのは近世の頃と指摘されている。善光寺本尊(阿弥陀如来)には皇極天皇をはじめとした女性の救済説話があったことから、有力女

性の信仰を集めていた。聖域は女人禁制として参詣を拒む寺社もある中、善光寺は女人の参詣を積極的に受け入れた寺社の一つであり、こうした背景も影響している^{※4}。



日本在来牛の見島牛(みしまうし)。写真は上野動物園の初春号。

牛は決して「のろま」なだけではない。長い歴史の中で人々の生活に親しみつつ、重んじられてきた。**ところで、牛？丑？**

さて、本稿では生物名として「ウシ」ないし「牛」を使ってきた。しかし表紙の図版にご注目いただきたい。

「十二支乃内 丑」とある。「丑三つ時」「丑寅の方

角」という言葉が示すように、丑は時刻や日付、方角を示し、子、丑、寅…と続く十二支の二番目。これに対応し一二種の動物をあてたのが、いわゆる干支である。「丑」の字に元来的に動物の牛を示す意味はなかったのだが、干支のイメージは人々に浸透し、曆上の丑にあたる日、丑の時刻に行われる儀式や催しには、「牛」に関連した習俗が生まれることになった。「寒中丑紅^{べに}」もその一つである。

「寒中丑紅」は寒の時期、丑の日に販売された紅のことだ。質が良いと言われる寒の時期の紅、殊に丑の日の紅は唇・口中の荒れを防ぎ、健康に過ごすことができると信じられた。紅屋には丑の日を知らせる幟が立ち、人々がこぞって買い求めるほど人気を呼んだ。この日に紅を購入すると、いわばノベルティグッズとして牛をかたどった小さな置物がもらえた。西洋式の口紅が主流になるに従って廃れていくが、江戸から大正・昭和の初めくらいまでは続いた習俗だったようだ。さらに丑紅は紅の品質だけでなく、おまけの牛の置物にも色々な効果が期待された。そのうちの 하나가、牛の置物を撫でると健康に過ごせるといふもの。これは「撫で牛」信仰の影響があるとされている。撫で牛は天神様、つまり菅原道真が牛に乗って大宰府に配流されたとの伝説から生まれた牛の置物で、撫でると病や災いを退けると信じられていた。道真を祀る天満宮に多いが、小さな座布団に載せて飾ることのできる卓上タイプもある。表紙の図版、女性を重ねた座布団上の牛に何事かを願っている。牛は天神の使いともされているのだ。

牛と神仏と人と

牛はさまざまな信仰に關わる存在である。スサノヲや天神は常に人に祝福を与えるわけではなく、地獄の獄卒は牛頭・馬頭、乱世の先触れに不吉な予言をする牛の姿をした妖怪は、件、人々が牛を尊びつつ、同時に物理的な力の強さだけでなく、マジカルな力についても、人には制御しきれないものとして畏怖していたことが表れている。牛は神仏の力の「容れもの」だった。

そういえば福島県会津地方の郷土玩具「赤べこ」はその名の通り赤い牛。無病息災、特に疱瘡除けを願う玩具だ。張子でできた空洞の胴体には、魔除けの力が詰まっている、と言って良いのではないだろうか。

人を、神仏を、そして願いを乗せて運ぶ。神仏の使いになる。時としては願いを受けとめる神仏そのもの。牛の置物を撫でつつ、色々な牛の姿と、人々が牛に託したさまざまな願いに、思いを馳せてみてはいかがだろうか。



「会津張子赤牛」『巨泉玩具帖』川崎巨泉 大阪府立中之島図書館所蔵

※1 日本在来牛とは、大陸から渡って来た牛の系譜を引き、かつ明治期に移入した西洋品種と交雑していないものを指す。
※2 「南予地方の牛の角突き習俗」として無形民俗文化財登録されている。
※3 祇園祭の祭神として知られる牛頭天王は、スサノヲと、四世紀以降習合し、同一視されるようになった。
※4 例えば徳川綱吉の生母桂昌院は、善光寺の熱心な信仰者の一人として挙げられる。
※5 一二種の動物が選ばれたのは中国とされているが、決定された経緯は詳らかでない。

◆「寒中丑紅」新しい牛の置物が登場

伊勢半本店では、毎年一二月と一月に紅をご購入いただいた方に、紅屋の風習「寒中丑紅」にちなみ牛の置物をプレゼントしています。今年は、収蔵品を再現する形で、新たに牛の置物を制作しました。

本号の特集記事でも触

れたように、江戸時代の紅屋では、「寒中丑紅」という大売出しの日を設け、寒中（小寒～節分の約一ヶ月）の丑の日に紅を購入したお客様に、景品として牛の置物を贈りました。丑の日が大売出しの日に選ばれた理由には諸説ありますが、江戸時代末期に流行った疱瘡（天然痘）を「クサ」と呼んだことから、「クサ」を食べる（＝疱瘡を治す）動物として牛が選ばれた、など、民間信仰を背景にしていると考えられています。紅屋と疱瘡の組合せに、唐突な印象を受けるかもしれ

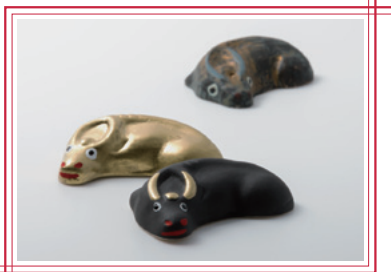
ませんが、紅をはじめとした赤色には、古来魔除けの意味があります。そのため、紅や赤色のものー紅で描かれた「疱瘡絵」や、特集記事に図版が掲載されている「赤べこ」ーを飾ることで、人々は疱瘡の治癒を願いました。

かつてこの景物は、大形・中形・小形の三種あり、紅の購入金額によって、お渡しする品を区別していたようです。江戸の人は、もらった牛の置物を、「撫で牛」のごとく撫でて健康を祈願したり、赤い座布団に載せて神棚に飾ったりしました。そうすると、その一年、着物に不自由しない、とされました。

新たな景物は、愛知県瀬戸市の有限会社 竹堂園に制作していただきました。竹堂園は、大正一三年（一九二四）創業の瀬戸焼の老舗の窯元です。収蔵

品を再現するということでご苦労もあったかと思いますが、試作を重ね、丁寧に制作をしていただきました。

今回は、金色と黒色の二種類を作りました。二〇一五年一二月～二〇一六年一月までに紅をご購入いただいた方のうち、一万五千円以上ご購入のお客様には金色の牛、それ以外のお客様には黒色の牛をお渡しいたします。思わず飾りたくなるような、可愛らしい牛です。紅とともにお手元にかがでましょうか。



寒中丑紅 牛の置物
(手前：新作／奥：収蔵品・大正時代初期)

Information かわら版

新春限定ミニ展示「吉祥～めでたく愛でたい～」

2016年1月9日（土）～31日（日）

紅ミュージアムでは、年明けの新春企画として「吉祥」にちなんだミニ展示を行います。鳳凰に鶴亀、大黒と宝尽くし、鴛鴦、福良雀、蝙蝠、犬張子、瓢箪などなど、めでたく、かつ愛でたくなる精緻な細工の資料を紹介いたします。出陳数は十数点とわずかながら、どれをとっても江戸時代末期～明治時代初期の職人の高度な技術が注がれた見応えのある資料ばかりです。2016年の始まりとともに、ぜひ「吉祥」をご堪能ください。

【特別協力・其角堂コレクション】
※常設展示室内の一部で展示を行いますので観覧料は無料です。

上：綴織紙入れ・其角堂コレクション
下：鳳凰をかたどった前金具（拡大）



期間限定商品のご案内

伊勢半本店では、1月5日（火）～3月6日（日）まで「小町紅『手毬』」春季限定柄3種（各9,000円／税抜）を発売いたします。吉祥の象徴でもある梅を配した「幸梅（さちうめ）」に、華やかで愛らしいデザインの「桃香」と「唐花」。春に向けて新たな門出を祝う贈り物に最適の一品です。



小町紅『手毬』幸梅（9,000円／税抜）

Since 1825
伊勢半本店 **ミュージアム**

●開館時間／10:00～18:00 ●休館日／毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>